

# ドグマティズム再考

善 明 宣 夫

はじめに

Rokeach (1954) によって体系化がなされたドグマティズム (dogmatism) は、権威主義的パーソナリティ研究の系譜上に位置づけられるパーソナリティ理論であるが、わが国では研究テーマとしてほとんど取り上げられることはなかった。これまでに、善明 (1989a, .b, 1991, 1992, 1993, 1996) はドグマティズム尺度の作成と信頼性の検討、その因子分析、MMPI との相関、自己概念や防衛スタイル (抑圧-鋭敏化)、極端な応答の構えを指標とした二分法的思考との関係等について検討を行ってきたが、そこでは Rokeach の理論から導かれた仮説を支持するような結果も、またそうでない結果も見いだされている。こうした否定的な結果が何に起因するものであるのかについてはその都度、あるいは別に稿を改めて理論的考察を行ってきたが、近年パーソナリティ研究全般にみられるこうした結果の不安定性を論拠として、パーソナリティや特性の存在自体を疑問視するような主張もなされている。そこで本稿では、こうした主張と権威主義やドグマティズムとの関係について検討を行うとともに、パーソナリティ研究の新しい基本的枠組みとして期待が寄せられている 5 因子特性理論や、これまでに取り上げられなかった欲求や自我発達との関係、さらにはドグマティズムによってもたらされる認知的機能の歪みの問題について考察を行い、今後の課題を探ることを目的としている。

## 1. 権威主義、ドグマティズムと一貫性論争

Pervin (1990) は、『現代パーソナリティ心理学小史』のなかで、「少なくとも過去30年を通じて、この分野の多くの批評家が累積的知識の欠如について嘆いてきた。われわれがこの50年の間にみたものは、その時々隆盛を誇り、やがては消えて行く研究主題の集まりであった」(p.11) とし、その具体例として、1950年代における硬さ、共感性、顕在性不安、権威主義、ドグマティズム、統制の位置に関する研究をあげている。さらに、古くは Jensen (1958) によって、「毎年、その大抵は前年の見解を困惑させるような新しい実験結果が報告される。しかし、心理学における理論について論駁がなされることはほとんどない。そして、それらはすぐに消えて

行く。……増殖し、寿命の長い研究を生み出す常套手段は、意味ありげな名称と興味をそそる内容を備え、簡単に施行できる測定用具を開発することにある。それらは因子的にはできる限り多次的であるほうがよい。そうすれば、それは他の多くの心理的測度との間に有意な相関をもたらすであろう」(pp.295,306) という皮肉をこめた指摘もなされている。

どの学問分野においてもそうであろうが、そこで取り上げられる研究テーマには何らかの意味において、その時代の社会的関心が反映されている。本稿のテーマである権威主義、ドグマティズムという概念も、もとはと言えば、第2次世界大戦中にナチスの行ったユダヤ人に対する非人間的行為や、結果的にそのような蛮行に加担した一般大衆の心理の解明という問題に端を発したものである。この問題を最初に取りあげた Fromm は『自由からの逃走』(Escape from Freedom, 1941) のなかで、人間が近代社会において獲得した自由の重荷という問題を基調に、権威への服従と無力な人間に対する支配という両面的傾向を特徴とするタイプをサド・マゾヒズムの性格、あるいは権威主義的性格と呼び、そうした社会的性格をもとにナチズム台頭の心理社会的過程について分析を行っている。

Fromm によって口火を切られた権威主義研究は、その後 Adorno, Frenkel-Brunswik, Levinson & Sanford に引き継がれ、ユダヤ人に対する人種的偏見に関する研究としてよく知られているカリフォルニア研究が実施された。これは1944年に開始され数年にわたって調査を行うといった大がかりな研究であり、その成果として『権威主義的パーソナリティ』(The Authoritarian Personality, 1950) が刊行されている。もともと、反ユダヤ主義から出発した彼らの研究の焦点は人種的偏見と敵意の問題であったが、最終的には、そのような社会的態度の基礎には、潜在的なファシストや非民主的プロパガンダに影響されやすい人に共通する特定のパーソナリティ構造が見いだされるとし、これを権威主義的パーソナリティと呼んでいる。権威主義者は、社会的地位や成功への関心が強く、順序が明白に構造化された社会的関係を好み、理想化された権威に服従的な態度を示すと同時に、自分の信じる因襲的な価値に背く集団や個人を非難、排斥し、場合によっては処罰する傾向が強いとされている。

『権威主義的パーソナリティ』の著者たちの関心は保

守的ファシストに向けられており、左翼の権威主義についてはほとんど問題にされることはなかった。しかし、Rokeachは権威主義という現象は右翼、左翼にかかわりなく存在するとし、政治的イデオロギーとは関連を持たないより一般化された権威主義について、これをドグマティズムと呼んで、その理論的体系化を試みている。要するに、保守的であろうと急進的であろうと、その思考や行動様式には共通するものがあり、権威主義という現象は政治的に両極に位置する集団にも、熱心な宗教の信者にもみられることがあるとしている。このような観点から、外界から情報を取り入れ、再構成する過程としての認知の問題を中心にまとめられたのが『開いた心と閉ざされた心』(The Open and Closed Mind, 1960)である。Rokeachはこのなかで、独自の信念システム理論を基本に、硬いカテゴリー的思考や二分法的思考、また結論の早急さなどの権威主義者に特徴的な認知の問題について詳細に論じている。

以上のように、1940～60年にかけて約10年の間隔で権威主義に関する重要な著作が刊行されてきた。またその内容には、社会的性格としての権威主義から個人的傾性、さらには認知の問題を中心とした政治的イデオロギーとは関連を持たないより一般化された権威主義へと、その論点には推移がみられる。アメリカにおけるパーソナリティ研究の歴史をふり返ると、Blake & Mouton (1959)の論評にもみられるように、1950年代は3A、いわゆる権威主義(authoritarianism)、不安(anxiety)、達成動機(achievement motive)というAの頭文字を持つ研究テーマの影響力が強い時代であったとされている。こうした指摘からも窺えるように、権威主義はその社会的関心からの高さから1950年代に最も集中的に取り組みのなされたテーマであったが、その後発表される研究論文の数も次第に減り、現在ではあまり顧みられることがないというのが現状であろう。

しかし、権威主義という研究テーマに対して関心が薄れていったのには別の理由も考えられる。それは権威主義的傾向を測定するために考案された質問紙(F尺度)の妥当性の問題である。1950～60年代にかけて、回答結果に影響を及ぼす応答の構えや応答バイアスの問題が提起され、質問紙法全般がこの対策に苦慮することになるが、F尺度もこの例外ではなかった。F尺度は、応答の構えのなかでも、特にCronback (1950)の提起した、検査内容に関わりなく検査項目に同意するという黙従傾向(acquiescence)との関係が指摘されており、たとえばChapman & Bock (1958)はF尺度の全質問項目が「はい」と回答することによって得点化がなされることから、結果には権威主義的傾向と黙従傾向とが混同されてしまい、測度としての妥当性に疑問が残るとして批判を行っている。一方このような批判に対しては、黙従傾

向は、それ自体が権威主義的傾向を表す特徴の1つであるので、むしろこのタイプの応答の構えによって検査の妥当性は高められるといった反論や、逆転項目の採用により、「はい・いいえ」という回答のバランスを考慮した改訂尺度の作成も試みられている(Byrne, 1974)。いずれにせよ、このような測定上の問題から、権威主義研究の焦点がその測定方法に関する論議へと移行したことが、研究者の関心を遠ざけていった一因と考えられる。

パーソナリティ研究においては、特性やパーソナリティ理論とその測定とは表裏をなしている。そこで、パーソナリティ特性やタイプの研究では、それらを測定するための測度、たとえば質問紙が開発されることになるが、前述のような測定技法上の問題から、ある質問紙の弱点を補うためにその改訂や、場合によっては別の質問紙が考案されることもある。さらには、研究者の好みにより、質問紙法以外の測定方法が選択される場合も考えられる。こうした傾向は、権威主義の近接概念である硬さの研究において特徴的にみることができる。たとえば、硬さの測度としてGough-Sanford Rigidity Scaleのような質問紙、ロールシャッハ・テストといった投影法検査、Luchins (1942)の作成した水差し問題、さらには固執(perseveration)に関する研究で用いられてきた知覚運動的課題など多様な指標が用いられてきた。測度に関するこのような混乱から、Brown (1953)は硬さという概念を研究する場合には、たとえ同じテーマではあっても、それがどのような方法によって測定されたものであるのかについてのただし書きが添えられるべきであると主張している。質問紙の修正や改訂は測定の精度を高めるという意味において望まれるところではあるが、同じ概念を複数の方法で測定することには問題も残る。こうしたやり方では、測度の異なる複数の研究から得られた結果を比較・総合したり、同じ組上で論議することが困難になる。冒頭の引用にみられるパーソナリティ研究における累積的知識の欠如についての指摘には、このような問題も深く関わっているものと考えられる。

さらに問題となるのが一貫性に欠ける、場合によっては仮説とは矛盾した一連の実験結果である。硬いカテゴリー的思考や二分法的思考といった権威主義者に特徴的な思考様式との関連から、権威主義やドグマティズムと極端な応答の構え(extreme response set)には正の相関がみられることが予想されるが、実際には一貫した実験結果が得られているわけではない。たとえば、Mogar (1960)の研究では有意な正の相関が見い出されているが、Peak, Muney & Clay (1960)やWhite & Harvey (1965)では有意な相関はみられず、逆にZuckerman, Norton & Sprague (1958)の研究では有意な負の相関が報告されている。権威主義やドグマティズム研究に限らず、パーソナリティ研究全般にみられる

こうした実験結果の不一致や矛盾は、後に一貫性論争 (consistency controversy) の引き金となり、それまでになされたパーソナリティに関する実験的研究全般について再検討した結果、安定した個人的傾性の存在を示唆するような確たる証拠はなにもなく、むしろ行動は基本的には特定の状況的要因によって決定されるとする Mischel (1968) の主張の主要な論拠をなしている。さらに、このような主張は人間の行動が相対的に安定した内的傾性、いわゆるパーソナリティや特性によって決定されるということを基本原理とするパーソナリティ心理学をその根幹から脅かすことになり、パーソナリティ研究は深刻な危機にみまわれると同時に、その後約20年にわたりこの問題に関してパーソナリティ研究者と状況論者との間で激しい論争が繰り広げられてきた。

現時点では、一般に一貫性論争はほぼ終息したとみなされている。この間の展開については、安藤 (1981)、佐藤・渡辺 (1992)、若林 (1993)、大淵・堀毛 (1996) によって詳しく論じられているのでここでその詳細については触れないが、少なくともこの論争を通じてパーソナリティ研究の将来に向けて一定の成果が得られたとする見方が強い。この点に関して堀毛 (1996) は、「一言でいえば、パーソナリティを社会的行動との関連の中でとらえるという視点の重要性と、社会的状況との力動的な関連を論じることの必要性について、研究者間の合意が得られたことであろう」(p.51) と述べている。行動が個人の内的傾性によるものか、それとも状況的影響によるものかについては、Hartshorne & May (1928) の問題提起以来、長年にわたり心理学における大きな争点であったが、状況論的立場からの Mischel の批判を契機とした一貫性論争を通じて、行動の予測や説明には個人的傾性とそれが顕在化されやすい状況との機能的関係を明らかにすることが重要であるとする相互作用論的アプローチへの認識が高まったことは事実であろう。

すでに述べたように、権威主義的パーソナリティは本来、反ユダヤ主義的な社会的行動や態度研究の過程で見いだされたものである。そこで他のパーソナリティ概念にくらべ、いち早く状況的要因との関係に関心が持たれてきた。たとえば、パーソナリティと状況的要因との相互作用を強調する立場から、Cherry & Byrne (1977) は「態度や認知的側面にみられる権威主義者の全体像は、行動の生じる文脈についての次元を明確にするほど妥当なものとなる。……刺激状況を多次元的に分析することではじめて、正の相関がみられたり、関係がみられなかったり、逆の相関がみられるといった結果が示す意味についての解釈が可能となるであろう」(p.121) とし、権威主義とそれが顕在化されやすい状況との機能的なつながりを明らかにすることの重要性を指摘している。さらに、権威主義と状況的要因との相互作用につい

て検討するには、いわゆる権威主義的傾向の表出が促進されるような状況設定のための枠組みが必要であるとして、F 尺度の因子分析結果をもとに同調性 (権威への従順さ)、攻撃性 (処罰傾向)、性的刺激に対する反応という3つの観点から実験的状況を構成することの有用性について示唆している。

ドグマティズムに関して、Ehrlich & Lee (1969) によって、新しい信念の獲得や古い信念を変えることへの抵抗といったドグマティズムの主要な側面に関する研究を概観した結果、そこでみられる実験結果の不安定性は、①信念を提供する権威の肯定性あるいは否定性、②信念の呈示方法、③既存の信念との一致度、④呈示された信念の新奇性、⑤呈示された信念の重要度すなわち中心性-周辺性という5つの媒介変数が未統制であることに原因があるという指摘がなされている。こうした指摘や前述のCherry & Byrneの主張にもみられるように、内的傾性の表出が状況的要因によって影響を受けることからすれば、権威主義やドグマティズムに関するより精緻なパーソナリティ理論を構築するには、今後そのような傾性と刺激内容やその呈示方法、あるいは刺激に関する自我関与水準を含めた状況的要因との機能的関係を明らかにしていくことが強く求められているといえる。

## 2. ビッグ・ファイブとの関係

近年、パーソナリティを5つの特性によって説明しようというパーソナリティの5因子モデルに多くの関心が集まっている。もともと5因子モデルは、因子分析を用いてパーソナリティの評価次元を特定しようとする研究において、度々5因子が抽出されたという経験的事実に基づいている。一般に、5因子モデルに関する研究はパーソナリティ理論を下敷きに構成された質問紙への反応を因子分析する質問紙アプローチと、辞書などから性格特性語を選び出し、そうした語彙リストへの反応を因子分析する語彙アプローチとに分けることができる。質問紙アプローチの立場からは、古くは Cattell のパーソナリティ特性に関する分析結果の再現を試みた Fiske (1949) によって5因子が抽出されており、これが今日の5因子モデルの原点と考えられている (Krahe, 1992)。パーソナリティの評価次元を特定するために因子分析を行うと5因子が抽出されるという結果は、この後も質問紙アプローチの立場から Tupes & Christal (1961) や Borgatta (1964) によって、また語彙アプローチの立場からは Norman (1963) によって見いだされている。

その後、Mischel (1968) のパーソナリティ特性に対する批判をきっかけとして再燃した一貫性論争により、こうした5因子モデルへの関心は一時衰退したが、1980

年代になると再び活発な研究が展開されるようになる。例えば、McCrae & Costa (1985) や Digman & Inouye (1986)、さらには Peabody & Goldberg (1989) らによって次々と5因子の存在が確認され、今日では「パーソナリティはビッグ・ファイブ (Goldberg, 1981) と呼ばれる5つの特性をもとに記述、説明することができる」とする5因子モデルが広く受け入れられるようになった。日本においても、柏木ら (1993, 1995, 1996) や和田 (1992, 1996) が、形容詞チェックリストをもとにした特性語の因子分析においてビッグ・ファイブの存在を確認しており、Costa & McCrae (1991) が開発したネオ人格目録改訂版の日本版を用いて、辻ら (1997) によっても同様に5因子が見いだされている。

こうした流れのなかで、現在ではビッグ・ファイブと呼ばれるパーソナリティの5因子モデルが広く支持されるようになったが、因子名やその解釈については研究者間で多少の不一致もみられている。第1因子、第2因子、第4因子については、それぞれ外向性-内向性、協調性-非協調性(愛情-敵意)、情動性-非情動性といったほぼ一致した命名や解釈がなされているが、第3因子は一応仕事や達成に関連した因子と考えられているが、勤勉誠実性、信頼性、達成への意志、自己統制等と研究者によって多様な命名がなされてきた。また第5因子は、一般に知的機能に関連した因子とされているが、Costaら (1985) は知的側面に限定することなく、より広い意味での経験への開放性因子として解釈を行っている。因子の命名や解釈におけるこうした研究者間の不一致は、Krahe (1992) も指摘しているように、因子分析という統計的手法の、項目の相関構造に基づいた因子数については一応のガイドラインを示すが、因子の持つ心理学的意味については解釈者の主観に対して寛容にならざるをえないという特徴によるものであろう。

こうした5因子モデルのなかでも、特に特性解釈に日本的、あるいは東洋的な概念を導入することにより、日本人のパーソナリティの総合的な記述、説明を試みている辻らのモデルが注目される。辻らのモデルでは、第2、3、5因子の解釈に従来の欧米での解釈とは異なった特徴がみられる。たとえば、第2因子は協調性-非協調性や愛情-敵意を表すとされてきたが、甘えの概念などの日本人に特徴的な対人関係のあり方を考慮して愛着性-分離性とし、その本質を関係性としてとらえている。また第3因子は、西洋的な意志的統制性と東洋的なあるがまま性とを両者を評価できる次元として統制性-自然性とし、第5因子は単に経験に対して開かれているか否かという側面ばかりでなく、そうした非日常的経験を楽しめるかどうかという視点を加味して遊戯性-現実性と解釈し、その本質を遊びとしている。

こうした独自の解釈のなかで、辻は第5因子(遊戯性

-現実性)の解釈において権威主義やドグマティズムについてふれ、「現実的な傾向の強い人は、現実から逸脱するような危険を冒さず、現実の世界に踏みとどまり、足が地についた着実な生き方を選択する。また、曖昧で不確実なものを拒否し、感傷におぼれることなく、現実的で確実な行動をとろうとする。しかし現実へのとらわれが強くなると、伝統や権威にしがみつかずにはいられない権威主義者や、ドグマに固執しそれを見直す余裕のない独断主義者などになる可能性もある。ただし、一般に権威主義、独断主義、硬直性、曖昧さへの耐性の欠如などといわれている特性は、単なる現実性を表す特性というよりも、無駄や不合理さを許さない統制性や、情緒不安定性(情動性)などとの複合的特性と考えるべきであろう」(p.67)とし、権威主義、ドグマティズムとビッグ・ファイブの第3、4、5因子等との関連を示唆している。

もともと Adorno らの定義によれば、権威主義は因襲的な価値への頑なな執着(因襲尊重)、そうした価値を体現する理想化された権威への服従的で無批判的な態度(権威主義的服従)、自分の信じる価値や権威に背く人や集団に対する処罰傾向(権威主義的攻撃)、人間性への敵対や侮蔑(破壊性とシニシズム)、主観的で、想像的な柔らかい心への敵対(反省性)、行動や出来事の説明における超自然的な決定因の受け入れやすさとカテゴリ的思考(迷信とステレオタイプ)、権力者への同一視や強さに対する過度の執着(権力とタフネス)、性的関心の強さ(性への関心)や、そうした性的、無意識的衝動の他者や他の集団への投影(投影性)という9つのクラスターで構成されている。権威主義者にみられるこのような特徴は一見まとまりを欠いたものにみえるが、『権威主義的パーソナリティ』の記述にみられる、「高得点者たちにつきものの、一般的に脅威に満ちた環境とか依りどころの欠如とかについてのあいまいで拡散した不安」(p.250)、さらには「ある人間の内的衝動、とくに攻撃性の衝動の他者への投射は、当然のこととして、危険で敵意にみちた世の中という考え方を生みだし、結果として他者への一般化された懐疑を生成させる。こうして、典型的な高得点の被験者たちは、他者への不信と懐疑とをあらわにする傾向を示す」(p.248)といった表現から、性や破壊といった未統制の無意識的衝動と自己を含めた人間全般への不信感とその精神構造の根底をなしていると考えられていることが理解される。さらに、そうした不信感や無力感の補償、あるいは反動形成によって、力への崇拝や柔らかな心への敵対、曖昧さを認めないカテゴリ的思考が生じるとともに、そのような防衛の特徴が合理化や正当化を通じて1つの社会的態度として表現された場合に、因襲主義や権威主義的服従、さらには因襲的な価値や権威に背くと考えら

れる人や集団に対する権威主義的攻撃がみられると考えられる。ドグマティストの場合も同様であるが、それは政治的イデオロギーとは関連を持たないより一般化された権威主義を表すものであるため、因襲尊重といった保守的態度ばかりでなく、より一般的に自分の信じる価値や信念を受け入れなかったり、それに対立する人や集団に対する不寛容さや攻撃性が特徴とされている。

権威主義者やドグマティストはその精神構造の基調に無力感や人間全般への不信が在り、そうした無力感や不信感から逃れる、あるいはそれを克服する手段として権威主義やドグマティズムの特徴を発達させるということからすれば、それらと自我防衛との密接な関係が示唆される。この点について、『権威主義的パーソナリティ』のなかで Frenkel-Brunswik (1950) は、「面接資料に関するこれまでの討論を通じて、いわゆる防衛機制の多様性についての言及が何回となくなされてきた。防衛機制には、性や攻撃性の抑圧、過度に潔癖さを強調すること、自分自身の受動性に対するさまざまな形態の防禦といったようなものが含まれている」(p.296) とし、権威主義者にみられる多様な防衛機制について言及しているが、Rokeach (1960) はそのような考え方をさらに発展させて、「閉ざされた認知システム (ドグマティズム) は、自己中心的な自己の正当性や、他者に対する道徳的批判の合理化や正当化のための体系的な認知的枠組みを提供する。このようにシステムが閉ざされていればいるほど、それは全体として強固に編成された不安に対する認知的防衛のネットワークを形成しがちであると考えられる。……極論すれば、閉ざされたシステムとは、そうした認知システムを形成することによって傷つきやすい心を防禦するように意図された精神分析的な防衛機制の全体的ネットワークにすぎないということ、ここで示唆しておきたい」(pp.69-70) として、ドグマティズムと不安防衛との関係について明確に指摘している。

こうした理論的背景をもとに、善明 (1989b,1993) は権威主義者やドグマティストにみられる不安や不安防衛の特徴について検討を行った結果、ドグマティズムと顕在性不安、抑圧-鋭敏化のいずれにも有意な正の相関 ( $r=.47$  と  $r=.45$ ) がみられた。このような結果から、ドグマティストはより不安が高く、知性化や強迫といった接近的な防衛方略を用いていることが明らかとなった。こうした実験結果や理論的考察から、自己の無力感や他者への不信に根差す不安から逃れる、あるいはそれに打ち勝つために、抑圧や否認というような回避的防衛に頼るのではなく、むしろ合理化や知性化などの接近的な防衛機制を用いることによって、理想化された権威を背景に強迫的に自己の正当化を図ろうとするドグマティストや権威主義者の姿を垣間見ることができる。

また、善明 (1989b) のドグマティズムと MMPI との相関研究では、MMPI の基礎尺度の多くとに有意な相関がみられたが、特に Si (社会的向性) との間に比較的高い相関 ( $r=.55$ ) が見いだされたことから、ドグマティストは内気、実直、因襲的、控えめ、責任感が強いなど、社会的により内向的であることが示された。こうした先行研究の結果を踏まえ、権威主義、ドグマティズムと 5 因子モデルとの関係について考えると、辻の指摘する第 3、4、5 因子との関係ばかりでなく、向性 (第 1 因子) や愛着性-分離性 (第 2 因子) をも含めた、ビッグ・ファイブとのより複合的な関係が予想される。

### 3. 欲求と自我発達

ここで、欲求や動機づけの側面から権威主義やドグマティズムについてみていくには、Maslow (1954) の欲求階層理論が大いに参考となる。周知のとおり Maslow は、アメリカにおいて精神分析、行動主義について第 3 勢力を形成する、人間性心理学 (humanistic psychology) を代表する研究者であるが、特に欲求や動機づけの問題を中心に独自のパーソナリティ理論を展開している。その理論では、一連の欲求ヒエラルキーにおいて、生理的、安全、所属と愛情、承認といった基本的欲求の不満足によって生じる欠乏動機づけと、自己実現の欲求に基づく成長動機づけとが区別されており、特にパーソナリティの発達において成長動機づけの重要性が強調されている。また、より低次の欲求、たとえば生理的欲求が満足されると、ついで安全欲求が出現するというように、欲求には階層構造が仮定されており、その漸次的満足によってより高次の欲求が出現すると考えられている。

前章でみてきたように、権威主義者やドグマティストの精神構造の根底には無力感や他者に対する不信に根差す不安や脅威が沈潜していることからすれば、Maslow の提示した欲求階層のなかでも、特に満たされない安全欲求との関係が示唆される。安全欲求とは生理的欲求につぐ基本的欲求であり、安全、安定、依存、保護、恐怖・不安・混乱からの自由、構造・秩序・法・制限を求める欲求とされ、より基本的であるがゆえに、有機体はこの欲求によって生理的欲求と同じくらい完全に支配されると同時に、この欲求によって、ほとんど排他的に、有機体の全能力を動員して行動が組織されると考えられている。

Maslow (1954) は、「我々の文化における健全で幸運な大人は、安全の欲求に関して満足を得ている場合が多い。……したがって、真の意味で、そういった人ではもはや安全欲求は実際の動機づけとしては存在しない」(pp.64-65) としながらも、一般的には満たされない

欲求が依然としていくらかは残り、そうした基本的欲求の残滓が個人の行動や価値観、世界観の形成に大きな影響を及ぼすとしている。そして、「平均的子どもやそれほど明確には見られないが我々の社会の平均的大人では、安全で秩序だった予想できる法則性のある組織された世界が好まれるのである。そこは、あてになる世界であり、予期しない扱いきれない混沌としたことや危険なことは起こらず、どのようなことがあろうとも強力な親または保護者がいて危害から守ってくれるのである」(p.64)とし、部分的に満たされない安全欲求によって、秩序や理念の絶対化や、場合によっては英雄崇拜が生じることの危険性について示唆している。

さらに、恐れや不安を募らせるものは何でも、退行と成長との間に横たわる力動的均衡を退行の方向に傾斜させたり、成長から離れさせるとし、秩序や法律、社会的権威が現実脅かされるときには、一般的に優勢になった安全欲求によって安全や保護を求めての退行が生じやすいとしている。これは、個人的傾性ばかりでなく、社会経済的状況や政治的状況の変化による環境的脅威によっても、安全や保護を求めて権威主義的傾向が高まることを示唆しており、このことはアメリカ社会において1930年代と1960年代後半の環境的脅威によって一時的に権威主義的行動が増加したとする Sales (1973) の指摘とも符合している。

つぎに、自我発達の側面から権威主義、ドグマティズムについてみていくことにしたい。自我の問題は、古くは衝動の統制や衝動、超自我と現実との調整という観点から、精神分析学を中心に論じられてきた。またより新しくは、その自律性を強調する Hartmann らによって、それは葛藤の産物、すなわち学習や経験の結果ばかりでなく、身体的成長と同様に生まれながらの生物学的基盤を持つものであり、欲動の発達の影響を受けることが少なく、その諸機能は比較的独立して発達すると考えられてきた。こうした課題解決のための諸機能の集まりとして自我を想定する立場とは異なり、Loevinger (1970) は「経験を制御したり、統合したり、意味づけようとすることは自我の持つ多くの機能のうちの1つではなく、まさに自我そのものである」(p.59)とし、目的論的、全体論的観点から、自己や世界を意味づけ、構造化する枠組みそのものとして自我をとらえている。

こうした自我観をもとに、Loevinger は Piaget の認知的発達理論や Kohlberg の道徳性発達理論に影響を受けながら、その発達を認知や経験を統合する基本的構造が質的に変化していく過程と考え、①衝動の統制、②対人関係様式、③意識的とらわれ、④認知様式という4つの側面から、それを10段階(7段階と3移行期)に分け、各段階の特徴について詳細な記述を行っている。また、自我発達には低次の段階から高次の段階へと一定の

生起順序がみられ、個人はその段階のいずれかに位置づけられることから、そうした特徴をもとに個人差を記述、説明することができるとし、自我発達をパーソナリティ研究の中心概念として位置づけている。さらに、こうした理論的背景をもとに、文章完成法による自我発達検査(WU-SCT; Washington University Sentence Completion Test)を考案しているが、わが国においてもWU-SCTを下敷きにして、宮下・上地(1981)、佐々木(1981a,b)、渡部・山本(1988,1989)らによって日本版の自我発達検査の作成が試みられ、その信頼性、妥当性について検討がなされている。

こうしたなかで、Loevinger は権威主義・ドグマティズムと自我発達との関係について、「標準的な権威主義者はこの段階(自己保護の段階)に属する。そのような人は服従したり、されることを喜びとする」(p.415)とし、自己保護の段階との関連を示唆している。この段階は自我発達の過程(10段階)では低次とされる3番目の段階であり、衝動的段階(第2段階)と同調的段階(第4段階)の中間に位置している。衝動のままに自己を主張し、直接的な外的圧力に出会うとその表出が抑制されるというような以前の段階とは異なり、これは、そのような外圧がなくとも賞罰を予期して衝動表出が抑制されるようになる段階である。Loevinger は、この段階への移行に関して、「人は自身のぎょっとするような衝動と、世の中の圧倒的な力とに気づく。そこで彼は道徳的に規定され、硬直的に強要され、変わることをない秩序を切望する」(p.415)として、衝動や現実の諸圧力を制御する自我の力が未発達であるために、そうした脅威から自己を保護する手段として絶対的な規則や秩序を求めるとしている。しかし、それまでの段階とは違い、この段階ではきまりのあることは分かっているにしても、それに反した場合、見つかるから悪いのであり、見つからなければよいといった便宜的なとらえ方がなされているのが特徴的である。また、とがめ(blame)の意識はあるものの、自己批判はまだみられず、それは外部(他者や環境)や自分の身体の一部に転嫁されることが多いとされている。

こうした、自我発達と権威主義に関する実証的研究として、宮下・上地(1984)は日本版の自我発達検査の妥当性の検証の一環として、自我発達検査と権威主義の測度であるカリフォルニア人格尺度(西山, 1972)との関係について検討を行ったが、自我発達段階と権威主義には何ら関係が認められなかったとしている。しかし、被験者数が60名と少ないこと、またLoevingerが男性用のSCTマニュアルを公開していないために被験者が女性に限定されていることなどから、この結果は安定したものとは考えにくい点もある。その後、渡部・山本(1989)が、①検査及び評定を簡易化する、②男性版と

女性版に共通性を持たせる、③幅広い年齢の被験者を用いるといった観点から、両性に使用できる独自の自我発達検査 (WY-SCT) を開発している。こうしたことから、権威主義やドグマティズムと自我発達との関係についてみていくには、今後そのような測度を用いて再度検討することも考えていく必要がある。

#### 4. 信念システムと認知的機能

獲得された知識が記憶内においてどのような形で表現され、蓄えられているのかは、認知心理学における重要な研究テーマの1つである。この問題に関しては従来より2つの考え方がなされてきた。1つは、獲得される情報の大半は「AはBである」という命題で表される事物に関する宣言的記述であるとするもので、これは宣言的知識表現と呼ばれる。もう一方は、それを課題状況に対処するための手続きや技能の集合であるとするもので、手続き的知識表現と呼ばれている。Rokeachは、個人の認知システムは宣言的知識、いわゆる信念 (belief) を基本に構成されるとする前者の立場をとっている。また、そうした知識は個人が真実として受容する命題としての信念ばかりでなく、虚偽として否定する命題である非信念 (disbelief) によっても形づくられているとしている。

論理的には非信念は信念の対称物にすぎず、それを取って取り上げることに意味がないとも考えられるが、信念の場合と同様に、受け入れられない命題 (非信念) の否定の度合や否定の仕方に個人差がみられることから、認知システム全体の心理的な特徴を探ろうとする場合には、非信念を措定することにも固有の意味が見いだされる。実際、非信念に対する不寛容さを特徴とする権威主義やドグマティズム研究では、信念だけでなく、特に非信念やそのあり方を含めて認知システム全体について考えることにきわめて大きな意味があるとされている (Rokeach, 1960)。このように、信念や非信念を構成単位として個人の認知システムについてみていくと、それぞれの命題に対して人によって異なった感情的色づけがなされることから、実際には論理的な操作だけによって命題の受容や拒否がなされているわけではないことが理解される。こうしたことから、認知システムは単なる論理システムではなく、むしろ感情的要素をも含む心理システムとしてとらえられるのである。

信念はすべてが同等に重みづけられているわけではなく、中心的なものから周辺のものまで多様な形態がみられる。Rokeachは、信念をその重要度に基づき、中心的領域、媒介的領域、周辺の領域の3つの領域にわたる5つのタイプの信念に分けている。中心的領域とは、いわゆる原初的信念 (primitive belief) と呼ばれるも

ので、個人が暮らしている世界や、自己または一般化された他者というものの本質について獲得してきた信念のすべてを意味するものである。これは直接経験を基盤として形成され、自己の存在や同一性に深く関わる信念であり、さらに合意的原初的信念 (consensual primitive belief) と非合意的原初的信念 (nonconsensual primitive belief) の2つのタイプに分類されている。前者は、物理的現実や社会的現実、さらには自己の本質に関わる信念で、たとえば「これは机である」、「これは私の母である」、「自分は誰々である」などがこの例としてあげられる。通常、こうした信念は疑義をさしはさむ余地のないもので、だれからも受け入れられている基本的な信念と考えられている。後者は、自己の存在や同一性に深く関わってはいるが、当人以外のいかなる人間もその真実性について確かめることができないもので、個人的な恐怖や妄想などがこの例である。しかし、より日常的な信念であっても、それがまったく合意を持たないようなものである場合にはこの信念に含まれる。例えば、自分の特徴についてのきわめて個人的で、非合理的な思い込みなどがこれに該当する。

つぎに、媒介的領域は、人が権威あるいは権威に加担する人々について持つところの信念で構成されている。個人が直接的に経験できる範囲は限られたものであるので、外的世界について信じていることの大半は、媒介者を通じて二次的に獲得されたものといえる。かりに直接的に経験したことだけしか信じないというのであれば、われわれの信念や知識は極めて制約されたものになってしまう。こうした二次的な信念の獲得は、ある媒介者は他のそれにくらべより信頼できる情報源であるという、それに先行する別の信念に依存している。すなわち、信頼できる情報源であるか否かについての別の信念をもとに、われわれは情報の信憑性についての判断やその取捨選択を行っているのである。この情報源である媒介者に関する信念が、媒介的領域を構成する権威に関する信念 (authority belief) である。ここでは、個人がどのような権威を信頼しているかといった情報源としての権威の種類や内容ではなく、どのようなタイプの権威であれ、それをどのように信じるかという権威への信頼や依存の仕方が問題とされている。この場合、権威との関係には個人差がみられる。たとえば、単一の権威からの情報をいとも簡単に信じ込むタイプもあれば、情報の受容が一時的で、複数の権威からの情報を比較、総合して信念を形成するタイプもある。そうした個人差は、権威というものをどのようにとらえているか、すなわち権威に関する信念のあり方によって決まるのである。

周辺の領域に属する1つの信念のタイプは、信頼を置く権威から派生したものであるということから受容されている信念で、派生的信念 (derived belief) と呼ばれ

る。このタイプの信念は、人が世界を図式化する際に細部を埋める働きを担っている。われわれは権威との直接的接触からではなく、たとえば権威を背景とした雑誌や書物などからの情報によっても信念を形成している。こうした、権威との間接的な接触をもとに形成された信念が派生的信念である。この領域に属するもう1つのタイプは末梢的信念 (inconsequential belief) と呼ばれる。これは個人的好みや反映されたもので、これまで述べてきた他のタイプの信念とはほとんど関連を持たない。そこで、末梢的信念に変化が生じたとしても、それによって他の領域の信念が影響されることはほとんどないと考えられている。これらの3つの領域を構成する5つの信念のタイプは、それぞれ中心性-周辺性という次元上に位置づけられる。合意的原初的信念が中心にあり、末梢的信念が最も周辺にある。信念システムに変化が生じる場合、中心的領域は変化への抵抗も大きく、周辺の領域が最も変化しやすい。また変化が生じたならば、周辺の領域の変化にくらべ、中心的領域の変化の方がシステム全体に及ぼす影響は大きいとされている。

こうした信念理論を基盤に、特に信念システムにおける媒介的領域、いわゆる権威に関する信念のあり方を中心に理論化されたのが、Rokeachのドグマティズムという概念である。既に述べたように、権威主義者には硬いカテゴリー的思考、結論の早急さや二分法的思考といった認知的特徴がみられる。こうした傾向は、硬さ (rigidity) や曖昧さに対する耐性の欠如 (intolerance of ambiguity) としてまとめることができる。硬さとは、効果的に機能するには思考や行動を変えねばならない場合にも以前の思考や行動パターンに固執する傾向を、また曖昧さに対する耐性の欠如とは、未分化で構造化されていない曖昧な状況に耐えられず、場を早急に構造化しようとする傾向を意味している。不確定な要素があるにも関わらず、結論を急ぐあまり、あらゆる事柄を過度に単純化された白か黒かの両極端の範疇で判断してしまう二分法的思考 (dichotomous thinking) は曖昧さに対する耐性の欠如の表出形態の1つと考えられている。

Rokeachによれば、こうした認知的傾向が生じるのは、媒介的領域のあり方に問題があるとされる。人はすべての事柄を直接経験することはできないので、何らかのかたちで情報の媒介者としての権威に頼ることになる。この際、そうした権威に対して合理的、一時的に信頼を寄せるタイプもあれば、それが超自然あるいは人間的なものであるにせよ、1つの社会理想という形をとるにせよ、そのような絶対的権威 (absolute authority) の存在を認め、それに過剰な信頼を寄せるタイプもみられる。後者の場合、権威によって是認されたものはそのまま信念として受容され、権威が虚偽として否定するも

のは非信念として拒絶されるようになる。このようにして、権威によって是認されるものと、それ以外のものといった極端な二分法的思考や判断が生じてくる。さらに、自己の信念システムを脅かすということから、それと矛盾するような情報は回避されるか無視され、場合によっては否認されることにより、従来の認知や行動が頑ななまでに維持されるようになるのである。

さらに、Rokeach (1954) はドグマティズムを「信念、非信念に関する相対的に閉ざされた認知システムであって、絶対的な権威についての一連の信念を中心に体制化されており、それによって他者に対するパターン化された不寛容さ、または条件付きの寛容さがもたらされる」(p.195) と定義している。ここでいう条件付き寛容さとは、人は同じ権威を信じている限りにおいて受容されるが、そうでなくなった場合にはただちに拒絶や排斥がなされるという意味である。また、こうした認知システムには新しい信念の獲得に対して開かれ、既存の信念を変化させる度合に応じて個人差がみられ、開放の極から閉鎖の極に至る連続体を成しているとされる。そして、開放の側を開いた心 (open mind)、閉鎖の側を閉ざされた心 (closed mind) と呼び、後者をドグマティズムと同義に用いている。さらに、ドグマティズム (閉ざされた心) では、中心的領域の信念が「世の中は脅威的で当てにならず、また自分は無力である」とするような否定的内容で構成され、媒介的領域の信念が「権威は絶対的」とするものであると同時に、時間感覚として過去・現在・未来という広がりや継続性を持った見方ができずに「相対的に狭い未来志向の時間的展望がみられる」とされている。また、こうした信念の内容ばかりでなく、①信念システムと非信念システムの分化度に大きな差がみられ特に非信念システムが未分化である、②信念、非信念システム (特に周辺の領域) の各部分が孤立している、③非信念全般の拒否度が高いといった構造面からも、閉ざされた信念システムの特徴づけがなされている。

2章でも触れたが、権威主義者やドグマティストはその精神構造の基調 (中心的領域) に自己や人間全般に対する懐疑や不信がみられ、そうした無力感や不信感から逃れる、あるいはそれを克服する手段として絶対的権威や社会理想への過剰な同一視がなされると考えられている。また、このようにして形成された閉ざされた信念システムにより、身勝手な自己の正当性や他者への道徳的非難を合理化し、正当化するための認知的枠組みがもたらされるのである (Rokeach, 1960)。信念内容にみられるこうした特徴とともに、権威による恣意的評価が絶対的なものとして受け取られることから、非信念がより強く拒絶されたり、非信念との接触が抑制されることによって、非信念システム全般が未分化であり続けるとい



った構造的特徴が生じてくる。さらに、権威は真実をもたらすという確信から、既存の信念や非信念との照合や新しい情報間の関連づけが十分になされずに、信念や非信念システムの各部分に孤立がみられるようになるのである。

ここで、こうした独自の信念システム理論に基づく Rokeach のドグマティズムという概念についてまとめると、①信念（非信念を含む）を基本的な構成単位として認知システムがとらえられている、②信念システムに中心性-周辺性という層構造が仮定されている、③信念システムに情報源についての信念で構成される媒介的領域（権威に関する信念）が設けられている、④信念の内容ばかりでなく、分化度や孤立度といった信念システムの構造的側面が重視されている、といった特徴づけがなされる。特に、信念を中心に個人の認知の問題にアプローチしようとする試みは、Bem (1970) の信念理論とともに、知覚的レンズとして作用する信念システムのあり方を合理的な方向へと変容させることを治療の主たる目標とする認知療法の発展に大きな影響を与えてきた (Lazarus & Folkman, 1984)。ここで、逆に認知療法的観点からドグマティズムについてみていくならば、それは特に権威（媒介的領域）に関する一連の非合理的信念 (irrational belief) で構成される硬く閉ざされた認知システムであり、そうした認知的歪みによって、他者に対するパターン化された不寛容さ、または条件付きの寛容さがもたらされると考えることができるのである。

今後に向けて

本稿の目的の1つは、これまでに権威主義やドグマティズムに関する理論的考察から導かれた仮説が十分に検証されなかった原因について、いわゆる人間-状況論争によって得られた知見をもとに再考察することであった。理論的考察からすれば、権威主義者やドグマティストがどのような自己概念（中心的信念）を持つかは、権威主義やドグマティズムについて実証的に概念規定を行っていく上で中心的な問題であるといえる。仮説として、ドグマティストには自己を含めた人間全般に対する不信や孤立に根差した否定的な自己概念が持たれていることが予想されるが、実際にはごくわずかの項目で仮説との一致がみられたものの、全般的には仮説を裏づけるような結果は得られなかった (善明, 1993)。同様に、ドグマティズムと ERS を指標とした二分法的思考との関係についても、仮説を支持するような結果は得られていない (善明, 1991)。こうした否定的な結果には、Ehrlich & Lee の指摘にもみられるように、刺激としての質問項目や評価対象に対してどのような情緒的、価値的意味づけがなされたかという、刺激の有意味性や自我

関与水準などの未統制の媒介変数の関与が示唆される。また、特に ERS を指標とした二分法的思考との関係では、ERS が個人の内的傾性（病理仮説）と刺激の有意味度（有意味性仮説）の両要因の複合的な働きによるものと考えられていることから、今後は個人の内的傾性ばかりでなく、刺激の有意味度といった状況的要因を含めて、両要因の機能的関係を明らかにしていくことが求められている。

また、本稿ではパーソナリティ研究における新しい基本的枠組みとして期待が寄せられている5因子モデルや、これまでに取り上げられなかった欲求、自我発達との関係について考察を行ったが、特に自我発達の問題は、自我防衛のあり方を含めて権威主義、ドグマティズムの重要な側面とみなされることから、今後さらに実証的に検討していく必要がある。最後に、近年、われわれの抱きやすい誤信をテーマとし、そこから人間の推論や判断といった情報処理能力に関する一般的制約や基本原理を探ろうとする研究が注目を集めている (Gilovich, 1991)。そこでは信念と合致する情報を過大評価したり、仮説に合致する情報だけに注意を向ける傾向など、われわれの誰もが犯しがちな認知的な誤りについて詳細に検討がなされている。こうしたことから、独自の信念システム理論を基盤に信念の問題を心理学的研究の俎上に載せ、権威主義というテーマを従来の精神分析的な解釈の枠を超えて認知システムのあり方の問題へと発展させた Rokeach のドグマティズム研究は、その後の信念を対象とした認知的研究の発展にとってきわめて大きな意義を持つものといえる。

#### 引用文献

- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswick, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N. 1950 *The authoritarian personality*. New York: Harper & Row. (田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳 1980 権威主義的パーソナリティ 青木書店)
- 安藤清志 1981 社会行動の研究におけるパーソナリティ変数の役割について 東京大学教養学部人文科学科紀要, 72, 113-138.
- Bem, D. J. 1970 *Beliefs, attitudes and human affairs*. Belmont, CA: Brooks/Cole.
- Blake, R. R., & Mouton, J. S. 1959 *Personality. Annual Review of Psychology*, 10, 203-232.
- Borgatta, E. F. 1964 The structure of personality characteristics. *Behavioral Science*, 9, 8-17.
- Brown, R. W. 1953 A determinant of the relationship between rigidity and authoritarianism. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 469-476.
- Byrne, D. 1974 *An introduction to personality*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Chapman, L. J., & Bock, R. D. 1958 Components of

- variance due to acquiescence and content in the F scale measure of authoritarianism. *Psychological Bulletin*, **55**, 328-333.
- Cherry, F., & Byrne, D. 1977 Authoritarianism. In T. Blass (Ed.), *Personality variables in social behavior*. New Jersey: Erlbaum Associates.
- Cronbach, L. J. 1946 Response sets and test validity. *Educational and Psychological Measurement*, **6**, 475-494.
- Digman, J. M., & Inouye, J. 1986 Further specification of the five robust factors of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50** 116-123.
- Ehrlich, H. J., & Lee, D. 1969 Dogmatism, Learning, and resistance to change: A review and a new paradigm. *Psychological Bulletin*, **71**, 249-260.
- Fromm, E. 1941 *Escape from freedom*. New York: Farrar & Rinehart. (日高六郎訳 1951 自由からの逃走 東京創元社)
- Gilovich, T. 1991 *How we know what isn't so: The fallibility of human reasoning in everyday life*. Free Press. (守一雄・守秀子訳 1993 人間この信じやすきもの: 迷信・誤信はどうして生まれるか 新曜社)
- 堀毛一也 1996 パーソナリティ研究の最近の動向 クラエ、B. 堀毛一也 (編訳) 社会的状況とパーソナリティ 北大路書房 51-54.
- Jensen, A. R. 1958 Personality. *Annual Review of Psychology*, **9**, 295-322.
- 柏木繁男・和田さゆり 1996 5因子モデル (FFM) による性格特性テストの併存的妥当性の検討 心理学研究, **67**, 300-307.
- 柏木繁男・山田耕嗣 1995 性格特性5因子モデル (FFM) による内田クレペリンテストの評価について 心理学研究, **66**, 24-32.
- 柏木繁男・和田さゆり・青木孝悦 1993 性格特性の Big Five と日本語版 A C L の斜交基本因子パターン 心理学研究, **64**, 153-159.
- Krahé, B. 1992 *Personality and social psychology: Toward a synthesis*. London: Sage Publication. (堀毛一也編訳 1996 社会的状況とパーソナリティ 北大路書房)
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer. (本明寛・春木豊・織田正美監訳 1991 ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究 実務教育出版)
- Loevinger, J. 1976 *Ego development: Conceptions and theories*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Luchins, A. S. 1942 Mechanization in problem solving: The effect of *Einstellung*. *Psychological Monographs*, **54** (6, Whole No. 248) .
- Maslow, A. H. 1970 *Motivation and personality*. 2nd ed. Harper & Row. (小口忠彦訳 1987 人間性の心理学: モチベーションとパーソナリティ 産業能率大学出版部)
- McCrae, R. R., & Costa, P. T. 1985a Updating Norman's 'adequate taxonomy': Intelligence and personality dimensions in natural language and in questionnaires. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 710-721.
- Mischel, W. 1968 *Personality and assessment*. John Wiley & Sons. (詫摩武俊監訳 1992 パーソナリティの理論: 状況主義的アプローチ 誠信書房)
- 宮下一博・上地雄一郎 1981 Loevinger の自我発達理論 — 理論の概要とその測定法の我が国への導入 — 広島大学教育学部紀要, **1**, **30**, 225-235.
- Mogar, R. E. 1960 Three versions of the F scale and performance on the Semantic Differential. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **60**, 262-265.
- Norman, W. T. 1963 Toward an adequate taxonomy of personality attributes: Replicated factor structure in peer nomination personality ratings. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **66**, 574-583.
- O'Donovan, D. 1965 Rating extremity: Pathology or meaningfulness? *Psychological Review*, **72**, 358-372.
- 大淵憲一・堀毛一也 (編) 1996 パーソナリティと対人行動 誠信書房
- Peabody, D., & Goldberg, L. R. 1989 Some determinants of factor structures from personality-trait descriptors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 552-567.
- Peak, H., Muney, B., & Clay, M. 1960 Opposites structures, defenses, and attitudes. *Psychological Monographs*, **74** (8, Whole No. 495) .
- Pervin, L. A. 1990 A brief history of modern personality theory. In L. A. Pervin (Eds.), *Handbook of personality: Theory and research*. New York: Guilford Press.
- Rokeach, M. 1951 The nature and meaning of dogmatism. *Psychological Review*, **61**, 194-204.
- Rokeach, M. 1960 *The open and closed mind*. New York: Basic Books.
- Rokeach, M. 1968 *Beliefs, attitudes, and values*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Sales, S. M. 1973 Threat as a factor in authoritarianism: An analysis of archival data. *Journal of Personality and Social Psychology*, **28**, 44-57.
- 佐々木正宏 1981a S C T による女子青年の自我発達の測定 教育心理学研究, **29**, 147-151.
- 佐々木正宏 1981b 成人男子の自我発達 東京大学教育学部教育相談室紀要, **4**, 131-137.
- 佐藤達哉・渡邊芳之 1992 「人か状況か論争」とその後のパーソナリティ心理学 東京都立大学人文学部人文学報, **231**, 91-114.
- 辻平治郎 1993 性格の5因子モデル: その構成概念の検討

- 甲南女子大学人間科学年報, **18**, 3-15.
- 辻平治郎 (編) 1998 5 因子性格検査の理論と実際 北大路書房
- Tupes, E. C., & Christal, R. E. 1992 Recurrent personality factors based on trait ratings. *Journal of Personality*, **60**, 225-261.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- 若林明雄 1993 パーソナリティ研究における「人間-状況論争」の動向 心理学研究, **64**, 296-312.
- 渡部雅之・山本里花 1988 文章完成法による日本人の自我発達研究 滋賀大学教育学部紀要, **38**, 51-64.
- 渡部雅之・山本里花 1989 文章完成法による自我発達検査の作成—LoevingerのWU-SCTの翻訳とその簡易化—教育心理学研究, **37**, 286-292.
- White, B. J., & Harvey, O. J. 1965 Effects of personality and own stand on judgement and production of statements about a central issue. *Journal of Experimental Social Psychology*, **1**, 334-347.
- 善明宣夫 1989b 独断主義に関する心理学的研究 関西学院大学人文論究, **39** 57-69.
- 善明宣夫 1991 認知体系の閉鎖性と極端な応答の構え：自己認知を中心として 関西学院大学臨床教育心理学研究, **17**, 5-9.
- 善明宣夫 1992 開いた心と閉ざされた心：ロキーチの理論を中心に 大阪商業大学論集, **94**, 91-106.
- 善明宣夫 1993 ドグマティズムと自己概念および適応水準 関西学院大学臨床教育心理学研究, **18**・**19**, 1-6.
- 善明宣夫 1996 権威主義、ドグマティズムと極端な応答の構え：その理論的考察 大阪商業大学論集, **106**, 177-194.
- Zuckerman, M., Norton, J., & Sprague, D.S. 1958 Acquiescence and extreme sets and their role in tests of authoritarianism and parental attitudes. *Psychiatric Research Reports*, **10**, 28-45.

(ぜんみょう のぶお・関西学院大学助教授)